

再びの決断

第5期生 池谷 真剛

小野ゼミでの2年間が終わろうとしている今、私は2年前の決断が正しかったことを確信しています。その決断とは言うまでもなく、小野ゼミの門を叩くということです。この冊子をご覧になる人のほとんどは、以前に私と同じ決断を下され今に至られているわけで、おいおい決断だなんて大袈裟な...と感じられる人も少なくないでしょう。けれども、私にとってそれは間違いなく決断でした。なぜなら、日吉で過ごした2年間のうち、勉強に費やした時間は文字通り皆無であったためです。そんな私が2年間の鍛錬を積みもうという決断をした時の心境は、歯医者へのドアを開ける小学生のそれに近いものがありました。何とかしなければという気持ちの次にあるものは、希望よりも不安だったかもしれません。

その決断からの2年間は、予想を上回る忙しさでした。勉強で周囲についていけているのか、不安になる暇もありませんでした。私の所属した10ゼミは、4月から論文活動を開始しなければならなかったですし、1級上の先輩がいなかったためもあったのか、5期生は今思えば妙なことでもいちいち悩みました。けれども、膝を突き合わせた数だけ、独特の連帯感が芽生えました。勉強ではもちろん、勉強以外でもソフトボール大会の優勝や三田祭出店企画の成功など様々な濃密な時間を過ごすことができました。

ここでふと思うことは、もし2年前に小野ゼミの門を叩いていなかったらどうなっていたのか、ということです。考えただけでもぞっとします。けれども、「小野ゼミに入るという決断」だけでは、その後の2年間の充実はおぼつかなかったでしょう。仲間と突っ走ることがなければ。そう、これだけ回り道をしておいて私は、決断後の行動が、決断の成否を左右することを学んだのだと言いかったのです。

ここ最近、私は大きな決断をしました。再び小野先生のお世話になるということです。その決断を下した時、既に本年度の大学院入試



2008年三田祭で「とん汁大二郎」の成功を喜ぶ著者（前列中央）と同期生

日程は全て終了していました。すでに大学入学以前に1浪を経験している私は、ここでもう1度自分のキャリアに足踏みを加えるということに不安があります。その不安は、歯医者へのドアを開ける小学生のそれ以上かもしれません。けれども、その決断が正しいかどうかを決めるのは、これからの自分次第なのだと思えば、もう先に進むだけです。